



# 愛光NEWS

2021年4月

2021（令和3）年5月14日発行

（編集）愛光本部総務部

（TEL）043-484-6391

（メール）<http://www.rc-aikoh.or.jp/>

立夏が過ぎ、日一日と日ざしがまぶしく感じられる季節となりました。騒然とした世の中ではありますが、季節は確実にめぐり、新緑等を目にするとつかの間の癒しを感じます。

新型コロナウイルス感染症は、収束どころか変異ウイルス対応という新しい局面を迎え、混迷を深めることになりそうです。気の緩みは、感染の発症につながることを自覚して、万全の基本対策を心がけたいものです。

## □事業経過など（2021.4.1～）

月/日(曜)	記 事
4 / 1(木)	辞令交付式／新任職員研修（～6日）
5(月)	新型コロナ「まん延防止等重点措置」大阪・兵庫・宮城に発出 （9日東京・京都・沖縄、16日千葉・埼玉・神奈川・愛知、25日愛媛にそれぞれ発出）
7(水)	ともいきプロジェクト
8(木)	広報委員会
12(月)	新型コロナワクチン65歳以上の高齢者に接種始まる
13(火)	感染症委員会・衛生委員会
14(水)	サービス責任者会議／施設長会議／業務執行理事会
14(水)	障害3施設職員PCR検査(第2回)
16(金)	ボランティア委員会
16(金)	菅首相初の日米首脳会談
19(月)	はちす苑職員PCR検査（第2回）
21(水)	ともいき食堂(お弁当販売)
25(日)	千葉県人材センター就職フェア
25(日)	3度目の緊急事態宣言発出(東京・大阪・京都・兵庫)～5/11まで
26(月)	新型コロナ感染死者1万人超える
27(火)	コンプライアンス委員会
28(水)	施設長会議／業務執行理事会
28(水)	はちす苑特養利用者、職員新型コロナワクチン第1回目接種
29(木)	昭和の日

## □職員状況（4/30現在）

	人 数	前月比
正職員	183	+10
サポート職員	36	-2
非常勤職員	133	-12
計	352	-4

## ■おもな出来事

### □置かれた場所で咲き誇れ

新年度が始まり1か月、新型コロナに戸惑いながらも新社会人、新入生も新たな環境に慣れてきたところでしょうか。法人には8名の新卒職員（常勤職員）が仲間入りしました。福祉業界は相変わらず人材不足が続いていますが、「愛光を選んでくれてありがとう」の心境でもあります。法人創立100周年まであと34年、法人の行く末を見届け、100年後の愛光を見てほしいものです。ちなみに男女でみると、男性2名、女性6名です。配属は、ルミエール2名、めいわ2名、リホープ1名、はちす苑3名で順調に業務に慣れてきているようです。

また新年度の人事で8名の職員の異動もありました。新たな場所で、新たな業務に取り組んでいます。それぞれ与えられた場所で花開き、活躍してくれることを期待しています。

### □コロナ対応

いよいよ新型コロナウイルスワクチンの接種が始まりました。法人内事業所では、はちす苑の特養利用者と職員が4月28日(水)に実施(1回目)しています。(詳細は、はちす苑月報で)障害3施設(ルミエール、めいわ、リホープ)の65歳以上の利用者の方へのワクチン接種は、5月中に接種できるように準備を進めています。

また入所施設(障害3施設、高齢者施設)に従事する職員に対するPCR検査は、第2回目として4月14日(水)19日(月)実施されましたが、全職員が陰性であるとの報告があり安心しました。

ただ、東京都を含む6都府県に発出されている「緊急事態宣言」と千葉県を含む8道県の「まん延防止等重点措置」は、5月31日まで延期されています。さらに変異ウイルスが感染の主体に置き換わる様相で、気の休まる日々は当分見込めそうもありません。世の中すべて同じなので、自粛疲れなどいわずに、ここはじっと我慢するしかないようです。

## ■月報から

### □2021年度事業計画について(法人本部)

第IV期中期経営計画(2021年度~2023年度)が開始された。2021年度から3年間の法人スローガンは『法人の進化と地域の回復』である。「自立経営」「ガバナンスの強化」「地域福祉」の3つを柱として更なる法人の進化を職員全員で目指す。新型コロナウイルス感染拡大で足踏みをしてしまった「ともいき事業」復活の期間となるよう事業の見直しや新たな福祉課題に対応したい。

新規に、人材育成プロジェクト、財務プロジェクト、高齢事業検証プロジェクトを立ち上げる。また、重点取組み事項として、虐待防止と不適切対応の一掃、法人内事故の共有と事故ゼロに向けた体制強化に、引き続き取り組む。

(事務局長 池田 浩一)

### □織りなす布に（福祉相談室）

相談業務を行う中で、日々相談員としての関わり方に葛藤を感じている。あくまで相談員は、窓口的役割であり、現場で一緒に直接的に支援することはない。しかし、現場の担当職員等と積極的に関わり、情報を収集することや、記録から読み解き、分析することで、現場での支援を一緒に考え、提案するよう努めてきた。また情報収集や分析は、のちに家族との話や相談員と話をするときに生きてくる。しかしこれは当たり前のことであるが、直接的な支援ではなく、利用者本人との関係づくりに直結しないため手ごたえが薄い。またお互いの領域内での業務が決まっているがゆえ、それらが福祉相談室(施設相談員)としてのジレンマとも考える。

現場職員は現場職員の関わり方があり、相談員は相談員としての関わり方があるのだと割り切ることも必要と考えている中、ある時歌手の中島みゆきさんの『糸』という曲を思い出した。この曲に「縦の糸はあなた 横の糸は私 逢うべき糸に 出逢えることを人は 仕合わせ(幸せ)と呼びます」という歌詞がある。この歌詞について、『関わり(出逢い) はそれ以上でもなく、それ以下でもないことであり、またそれはその後どのように成熟していくかが重要なのだ』とある人は解説している。

自分自身が抱えているジレンマ自体が愚かな考えであり、それぞれの役割がそれぞれの働きをすることに意味があると痛感した。例えその関わりがのちにどのような『織りなす布』になるかはわからないが、この曲では『いつか誰かを暖めあうかもしれない』と表現していることから、決して無駄な関わりはないとポジティブに考えることができる。

(福祉相談室相談員 林 拓也)

### □花まつり行事食（栄養管理室 - 障害者支援事業部）

お釈迦様の誕生日である4月8日を祝う行事を花まつり（灌仏会：かんぶつえ）という。今年は桜の開花が例年になく早かったので、桜の時期ではなくなりましたが、春らしい献立を提供し、春の到来と新年度を祝った。桜の花びらと葉っぱの入ったピンク色のちらし寿司、ふきと油揚げの煮物、うどんと花麩のすまし汁、桜餅風生和菓子の献立にした。生和菓子は練りきりになっており、お餅が食べにくい高齢の利用者にも食べやすいよう工夫されているものを提供した。今後、障害者支援事業部の利用者も高齢化が進んでくるので、食べやすい食材や調理法の研究を積極的に行い、献立に取り入れていきたい。

(障害者支援事業部管理栄養士 武石 美紀)

### □新型コロナワクチン接種始まる（はちす苑）

佐倉市から「高齢者施設の入所者を優先して新型コロナワクチン接種を始めます」と連絡があってから1ヶ月後、当初「職員の同時接種は難しい」といわれていたが、ワクチンが予定数以上の入荷ができる見込みとのことで、職員も接種可能と再度連絡があり、4月28日に入居者60名、職員25名のワクチン接種を実施した。嘱託医と看護師が綿密な準備と連携を図ることで、約1時間15分で無事に85名、第一回目の接種が終えることができた。接種後、肩の痛みは出るものの、大きく業務に支障をきたすような副反応はなく、入居者、職員ともに大きな体調の変化はなかった。ただし、2回目接種以降、発熱の副反応が発生する可能性があるとのことで、解熱剤を多めに用意したり、職員の接種日を新たに設けるなど、発熱によるスケジュールを調整している。

(はちす苑課長 戸室 輝大)

### □奇跡の面会（ルミエール）

先日、ご家族に個別支援計画書をはじめケース記録等書類を送付したが、その中に「オンライン面会のお知らせ」を同封した。できるだけわかりやすくオンライン面会ができるように作成して送ってみたところ、数組のご家族からメールで返信があり、面会ができるよう予定を組んだ。その中の1組のご家族を紹介したい。面会の機会が減ってしまった東京在住のお兄さんより連絡が入り、オンライン面会をしたいのですが、できれば鹿児島にいる母と弟とも一緒に面会をしたいと希望があった。既にこの時点でお兄さんと職員が、オンラインで打ち合わせが進んでおり、普段からリモートワークをされているお兄さんは鹿児島のご家族とも連絡を取り合っており、万全の準備をしてくださっていた。

面会当日、東京～鹿児島～佐倉がつながり、お母さんが「〇ーくん、〇ーくん」と声をかけるとAさん（盲重複・難聴）は何が起きたのか理解できない様子だったが、お母さんが何度も声をかけるとわかったようで顔を真っ赤にして笑顔になった。約10年会うことができなかったお母さんは泣きながらAさんに謝られていたが、Aさんは声を出しながらお母さんの声がするパソコンの画面に手を伸ばしていた。オンライン面会は15分で終了したが、コロナ禍だからこそできた面会であった。これからも利用者のご家族をつなぐ支援ができればと思う。

（ルミエール課長 原 宏之）

### □福祉でもアナログとデジタルのバランスを考える時代（めいわ）

社会のさまざまな分野でITなどの言葉が聞かれ、すでに定着している分野もあれば発展を続けている分野もある。

IT技術の進化によって、福祉分野においてもさまざまな変化が見受けられる。めいわも、ここ数年で居室のセンサーが増えた。最初は1階の高齢の利用者対応が多かったが、徐々に2階の利用にも増えていく傾向である。

めいわでの居室のセンサーは、離床センサー、フットセンサー、コールセンサー、ドアセンサーの4種類を使用している。本人とのコミュニケーションの手段としての役割が大きい。そのため、ITの技術を有効に活用しているICT技術であると言える。利用者の状況の変化とともにデジタル技術を導入していくことは避けられない時代となった。

その中で、人間としてのコミュニケーション技術とデジタルを介してのコミュニケーション技術をどのように考えるかが問われる時代かもしれない。（めいわ課長 李 連淑）

### □新たな仲間を迎え（根郷通所センター）

新たに4名の利用者の送迎を始めた。3名は退所や引っ越し等により空席ができたため、保護者へ送迎希望のアンケートを実施し、5月6日より乗車を始めた。1名については、年齢と体調を考慮し、新たなコースとして送迎を始めた。

ご家族での送迎の手間がなくなり、ご家族には喜ばれている。利用者本人も送迎車に乗ることが楽しいようで、ある利用者は帰りの会が終わるのを待ちきれずに、バスに乗車しに行ってしまうくらいである。

送迎サービスは、生活介護事業の要でもある。実際に送迎を利用している利用者の65%が、四街道市の方である。生活介護事業所が四街道市内に少なく、送迎がないと通所できない利用者にとって、根郷通所センターの存在は大きい。利用者の生活の糧となるべく、既存の送迎ルートや車両台数等、現状に満足せず、今後も積極的に展開を考えていきたい。

（根郷通所センター主任 高梨 和憲）

### □新体制スタート（リホープ）

前年度より感染症の関係もあり、リホープのみで日中活動を行っていた。今年度もその体制は継続になり、作業班の編成を変えてのスタートとなった。陶芸班、創作班を休止し、園芸班、手工芸班、受注班、リハビリ班に分かれ活動している。休止となった班に所属していた利用者は、新たな班の体験をし、それぞれが希望する班に移り活動を開始している。班を少なくしたことで、一つの班に関わる職員の数が増えたため、これまでよりもきめ細かい対応、充実した内容で取り組めるよう、各班で取り組んでいる。ここ数年、高齢化により居室にこもりがちになっている利用者も増え、個別に対応することが難しかったが、少しずつでも外に出る機会を増やし、他利用者との交流の機会を得られるようなアプローチも行っている。居室で横になっていることが多かった利用者Iさんは、大のカラオケ好き。活動に行きましようとお誘いしても、「いいよ」と参加しないことも多かったが、カラオケやお楽しみ会に行きましようとの声掛けには徐々に応じるようになり、「歩けないよ」と言いながら、1階の居室から2階のリハビリ班まで歩いていく姿が見られるようになった。響きのある声で十八番を歌い上げると、笑顔で他の活動にも参加している。地域移行を目指している利用者には、移行後の日常生活を想定したパソコン訓練の時間を確保することが出来るようになった。テープ起こしの仕事を想定し、少しでもタイピングのスピード、正確性をあげられるよう取り組んでいる。

新体制になったことが利用者にとってのプラスとなるよう、今必要なこと、先を見据えて取り組むべきこと等考えながら進めていきたい。  
(リホープ課長 稲垣 直子)

### □はたらいて笑顔に そして新しい挑戦！（佐倉市よもぎの園）

今年度のスローガンには、昨年度と同様に“新しい挑戦”という言葉が入っている。昨年はコロナ禍で自主生産活動という形で、新しい挑戦をおこなうこととなった。手探り状態で始まった活動であったが、利用者、職員が協力し合いながら活動を続けてきた。未だにコロナの影響を大きく受けている状況ではあるが、受注作業の復調を待つだけではなく、自主生産活動として新しい需要を開拓していきたいと考えている。

昨年末には千葉県補助事業により業務用刺繍ミシンを導入することもできたので、新しい強みとして活用できればと思う。現在は、私立保育園からオリジナルワッペンが作れないかとの話を受けており、プレゼンを行っているところである。

(佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一)

### □新規訪問ケースより（ワークショップかぶらぎ）

4月よりライフステップコース自立訓練（生活訓練）において訪問による支援を開始した方が3名いる。それぞれ親元を離れ、初めて自身の生活を切り盛りしなければならなくなったが「家電の使い方がわからない」「物の整理の仕方がわからない」などいろいろと難しいことがみえてきた、という状況にあった。

生活の主体である本人の持っている能力に適合するよう情報の整理や工夫を行い、順調に生活が整い始めている。生活面での支援の中から本人のアセスメントを進め、必要であれば病気や障害の理解、日中の充実した活動へと話を進めていきたい。

(ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹)

### □いつもコツコツと（ジョーの家）

四街道市の福祉事業所で、クリーンスタッフをしている利用者がいる。ある時ふと仕事の話になり「僕、会社で表彰されたことがあるんですよ」と言って自室から表彰状と事業所長が作ってくれたという資料を持ってきてくれた。

資料には、介護スタッフが使用するテーブルが乱雑になっている状態から整理カゴを駆使して綺麗に整理された状態になったという内容が記されており、クリーンスタッフとして働く彼が、所長に「テーブルを少し整理したいが良いか」と申し出て了承され、その行動が千葉県内の事業所のコンテストで評価されたということらしい。

そして彼は「所長やスタッフは普段から僕に挨拶してくれて、他愛もない会話をしてくれた。今が悪いわけではないですがスタッフがほとんど変わってしまって…。仕事に必要なことは話していますよ。でもあの頃の職場は楽しかったなあ。」と話した。

ここまで聞いて、これは賞がもらえて良かったということより、職場の一員として認められ、所属感があったという話なのだと思えた。障害者枠で働く短時間勤務のクリーンスタッフも、他のスタッフと同じように能力を開花、評価される一体感のある職場だったのだろう。

資料の最後のページには、今より少し若いころの彼が笑顔で写真に納まっており、副題には“いつもコツコツと”と銘打たれていた。（ジョーの家サービス管理者 宮部 和樹）

### □エールを送りたい（山王の家）

山王の家を見学して「OKです。有り有りです！」と即答した方が、4月の第2週に1週間の体験利用をおこなった。

リホープでの短期入所の際の懸案事項等があったが、体験中は何事もなく過ごすことができていた。ご本人に体験の結果を伺ったところ、予想以上に快適であったとのことで、諸手続きを終え、4月26日に正式入居となった。

思い起こせば、本人との出会いは11年前の平成22年である。本人が自宅に引きこもっているので何とかしたいという家族の依頼で、初めて本人に会った。自立訓練事業で初のモデルとなる、自宅から通所を始めた最初の方だ。その後、なかなか通所が定着せず、現在の根郷通所センターに通所先を変えたのは、私がアシストで相談担当をしていた時だ。見事に本人の意向にマッチし、安定して通所ができるようになった。

あの頃から11年、遂に年相応の自分らしい生活が実現する。当時の本人も家族も想像すらできなかったことだろう。これまでは、本人のヘビーな飲酒や喫煙を絶つという並々ならない努力があったからではないだろうか。

今までは、自宅と通所の往復だけで、欲しいものがあれば両親が購入してくれていたようだが、これからは、お小遣いを持ち、自由に買い物もできる。これまでの道のりが、本人にとって長かったのか短かったのかは分からないが、これからの栄えある生活にエールを送りたい。（山王の家サービス管理者 高梨 和憲）

### □図書室 OPEN（南部児童センター）

新型コロナウイルス感染症対策の一環として閉室していた図書室を、新年度のスタートと共に開室することにした。昨年末にも開室の準備を進めていたが、2度目の緊急事態宣言が発令され、たちまち延期にしてきた経緯がある。未だコロナ禍は収まりそうもない。近隣の図書館の対応を参考に、図書室前にも手指消毒液を設置し、閲覧した本は72時間経過してから本棚へ戻すことにした。図書室内も「三密」にならないように、テーブルやいすなどを撤去するなどの配慮をした。これまで、感染症対策について何度も話し合いを重ねて、慎重にオープンした図書室である。親子で楽しそうに絵本を手にとって読んでいる姿を見ると、これまでの苦労や日々の環境整備の労力も、一瞬で報われた気分になる。今後も安全安心に配慮をしつつ、過ごしやすい環境づくりを目指していきたい。

（佐倉市南部児童センターインストラクター 吉田 知加子）

### □コロナ みんな健康で（学童保育所）

山王小学校で感染が発生、感染状況が確認されるまでの間、5月7日(金)から臨時休校となった。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、山王小学校の子どもたちが利用している山王学童保育所も、臨時休所することになった。休所期間中は、いつにも増しての除菌消毒作業や保健所からの問い合わせへの対応など、忙しい日々となった。濃厚接触者を確認するために、保育室の窓の開閉時間や子どもたちの配置、環境など、次から次へと問い合わせがあった。

いつ何時同じことを尋ねられても良いように、記録を取っておく取り組みを新たに始めた学童保育所もある。毎日50～60人の子どもたちが日々入れ替わる。かつ低学年のみの構成で、おやつは時間こそ決めているが、食べるか否かは家庭や自己選択としているため、職員の記憶では後追いすることは難しい。昨年春からのコロナ以来、子どもたちのおやつの様子もニュースタイルとなり、マスクを取って話をすることもなく、隣りの子どもとはシールドで仕切っている。そんな中で、せめて一緒に食べたい仲間と、今日仲良くなったあの子の隣で食べられるようにと、席は自由にしている。万が一の際には、いつでも対応できるようにと、可能な限り記録をとるようにした。職員の手数は増えるが、スタッフの快諾を受け開始したところである。どうぞみんな健康で！と祈る毎日である。

（学童保育所主任 齋藤 理江）

### □YouTube 始めました！（総合相談センター）

包括支援センターでは、認知症サポーター養成講座を実施しているが、昨年度はまったく行うことができなかった。そこで認知症を身近に感じてもらい、広く知ってもらおうと、「認知症について知ろう」という動画を作成しYouTubeにアップした。内容は、中学生のためのサポーター養成講座を参考に作成しており、大人が子どもに伝えるための教材としても使っていただけたらと思う。是非、包括職員によるぬいぐるみ劇と紙芝居を見ていただきたい。

今年度は新たな取り組みとして、介護予防の体操や認知症関連等、YouTube配信を行っていかうと考えている。高齢者を対象とする事業をオンライン配信でどこまで普及できるかは課題であるが、地域の方の意見を聞きながら、試みたい。

（総合相談センター所長 森 由美子）



QRコード参照

### □瞑想によい大広間（地域福祉センター）

南部地域福祉センターは、周りを森や林で囲まれ、のどかでとてもよい環境にある。4月、A棟の窓を開けると、「ホーホケキョ」とうぐいすのさえずりが毎日聞こえる。147畳あるA棟の大広間では、月2回、午前中に太極拳教室が開催されている。先日、太極拳の講師より「大広間の窓を開けていると、うぐいすのさえずりが聞こえ、太極拳の瞑想時にとてもよい場所である」とのことであった。瞑想は、激動の現代社会で、時間に追われる日々から離れ、リラックスできる、気持ちが落ち着く、ストレス解消になるなど、その効果が取り上げられている。瞑想とは、心を整える、心のエクササイズといわれている。太極拳での瞑想にとってもよい環境であるこの大広間を、今後も活かしていきたい。

（地域福祉センター所長 横川 民夫）